来いたちが、 見てきいてうちした。 インクルーシヴを鑑賞 ワークショップのきを発し ワークショップのきを発し







慶應義塾大学アート・センター (KUAC)

1993年に開設された大学附属の研究センター。 特定の分野や思想、理論体系にかたよることなく、総合大学の特徴を活かした領域横断性、すなわちさまざまな学問分野の成果を総合する立場から、現代社会における芸術活動の役割をテーマに、理論研究と実践活動をひろく展開しています。

都市のカルチュラル・ナラティヴ (カルナラ)

現代文化の発信地、国際都市として知られる港区は、同時に、多くの 寺社仏閣や史跡、そして歴史ある企業が所在する歴史文化都市でもあ ります。このダイナミックな時間軸をもつ都市文化の眺望を、一層明 らかにするためのプロジェクトが、「都市のカルチュラル・ナラティヴ」です。 今年度の事業では「社会包摂(インクルーシヴ)」的視点に目 を向け、東京海洋大学マリンサイエンスミュージアムでの対話ツアー や大本山増上寺でのトークイベントを企画・実施しました。

視覚障害者とつくる美術鑑賞ワークショップ

2012 年発足。代表は林健太さん。横浜美術館や東京都写真美術館をはじめとした全国の美術館や学校で、視覚障害者と晴眼者が言葉を介して一緒に美術鑑賞をするワークショップを行なっています。 ※以降、本冊子では便宜上「とつくる」と略称させていただきます。

もくじ

ごあいさつ … p. 2

インクルーシヴってなに? … p. 3

出会ったことば … p. 4

取り組んだこと … p.6

学んだこと … p. 9

発見! ··· p. 12

失敗した~ ··· p. 1 4

もやもや どっちがいいんだろう? … p. 16

こぼれ話 … p. 18

編集後記 ··· p. 19

こんな本やサイトが参考になりました … p. 20

みなさん、こんにちは!

慶應義塾大学アート・センターでは2023年1月から3月にかけて、 インクルーシヴ鑑賞ワークショップを実施しました。

その準備段階や実際に関わった人との対話から多くのことを学びました。この ZINE では、そんな学び、気づき、そして失敗談などを学芸員補・吉岡萌とインターン生・福田真子の視点からざっくばらんに綴っていきます。運営側の生の声として、みなさんがインクルーシヴ関連のワークショップ等を行う際の参考になれば嬉しいです。



吉岡萌

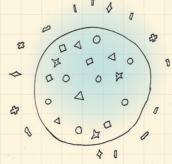
慶應義塾大学博士課程。研究領域はフランス新古典主義美術。2020年から1年間、アーティゾン美術館で、インターンシップ(教育普及)を経験。その際に「鴻池朋子ちゅうがえり」展の関連プログラム「みる誕生」鑑賞会の実施に関わり、ユニバーサル・ミュージアムやインクルーシヴ鑑賞ワークショップの取り組みに関心を持つ。現在は慶應義塾大学アート・センター学芸員補として、展覧会関連イベントや鑑賞ワークショップの企画・実施に携わっている。



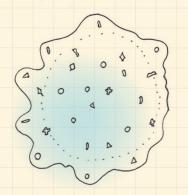
福田真子

ドイツ在住。大学に通いながら、ウェブマガジン/コレクティブ「ヴァルナブルな人たち」、Zine イベント「ZINEFEST Leipzig」を運営。ライプツィヒのコミュニティスペース「日本の家」の活動に関与するなど、中間共同体に関心を持ち活動を続ける。2023年1月から3か月間 KUAC ヘインターンとして在籍。@magazine_vulnerable people

インクルーシデッフなに?



エクスクルージョン あるコミュニティからある一定の ものが排除されているイメージ。



インクルージョン 全ての人がそのまま、まるっと他 のものと共存しているイメージ。

障がいについて語る時にインクルーシヴ/インクルージョンを始めとして、ユニバーサル、ダイバーシティー、バリアフリーなど似たような言葉がたくさん登場します。そのため私たちもどの言葉を使うか迷いましたが、「インクルーシヴ」を選びました。

インクルーシヴは、英語から来ていて「inclusive」と書き、「全てを含んだ、包括的な、包含的な、包摂的な」という意味があります。対義語は「エクスクルーシヴ(exclusive)」で「排外的な、排他的な」という意味があります。

「インクルーシヴ」とは、個人のそれぞれの差分 や強みを埋めたり、平均化しようとするのでは なくて、社会の全ての人を「含み」、その特性を 活かせる社会、環境にしていこうという考え方 だと私たちは考えました。

2023年の日本においては、障がい者をはじめとして、女性、LGBTQ +、非日本語話者、高齢者といった少数派とされる人たちや生きづらさを感じている人たちなどその他にも、多くの人が含まれるのではないでしょうか。

障がい者、障害者

「障害」表記には「障(害/碍/がい)」といったヴァリエーションが存在します。近年では「障がい」とひらがなで表記されることもありますが、意味そのものの変換を伴わない消極的な置き換えとして批判の声もあります。また、慶應義塾協生環境推進室でも「障害」は社会や環境の側にあるということをより意識する観点(障害の社会モデル)から、漢字表記を用いる立場をとっています。私たちはこのような考え方に賛同しつつも、ワークショップにスタッフとしてご参加いただいた視覚障がい当事者からの意見を踏まえ、今回の ZINE では「障がい」という表記を使っています。

▶これ、どっちがいいんだろう?もやもや 「障がい」という言葉の扱い方…p.16

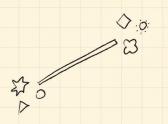


点訳

文字や文章を点字で書かれた文章に翻訳すること。点字図書館等の機関に依頼すれば、チラシや本に含まれる文章を点訳して貰えるほか、市販の簡易な点字機を用いれば、個人でも点訳をすることが可能です。ただし、例えば URL のような複雑な文章は、機械を用いると正確な翻訳が出来ない場合もあるらしく、プロに依頼したほうが確実です。



目の 見えない人 見えにくい人 見える人



「まっすぐモード」 と 「ぶらぶらモード」

今回のワークショップでは、参加者を「目 の見えない人」「見えにくい人」「見える 人」という風に呼びました。健常者/視覚 障害者という二項対立ではなく、このよう な呼び方を用いることで、サポートする側 /される側というような視点が排除され、 その場の関係性がフラットになる気がしま す。 実際ワークショップ内では、必ずしも 見える人が一方的に説明するだけではあり ません。見える人はつい目の前にある「正 解」を探しがちですが、見えない人ととも に様々な見え方を共有することで、作品の 解釈や意味が新たに立ち上がってくる瞬間 があります。このように、みんなで対話し、 影響を与え合いながら作品を鑑賞すること で、人と人の関係も「揺れ動く」ことにな ります。

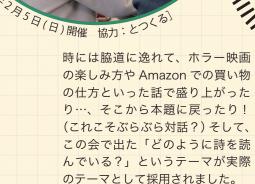
「とつくる」さんが実施しているワークショップで用いられる 2 種類の鑑賞方法です。「まっすぐモード」は目的がはっきり決まっている話のことで、例えば、目に見えることを言葉にしたり、専門家に話を聞いてみたりするモード。対して「ぶらぶらモード」は目的が明確でない曖昧なお話を指します。このモードのように、思いついたことや取り止めのないことを適当に話してみることで生まれる面白さや、雑談のほうが上手く伝わる物事もあるでしょう。 今回は「まっすぐ」と「ぶらぶら」を組み合わせて対話を実施しました。大事なのはあくまでふたつのモードの存在を知ること。最初にモードについて説明することで、どのような人でも発話しやすい雰囲気が形成されていました。

耳又り利用んだこと



実際の点字図書や点字入りチラシとと もに、点訳の制作方法や予算について 教えていただきました。一階にはショッ プもあり、拡大読書機や文字を読みや すく拡大したラジオの番組表といった 様々なグッズが販売されていました。 今回は簡単な「点字機」とシールを購 入してみました。そして QR コードを 示す点字シールを「詩のおみやげ」カー ドに貼って、西脇展関連ワークショップ で配布しました!

ワークショップ「読書/詩を読む編」 の準備として、本を読むのは音声? 点字?知らない本にどうやって出会 う?など、それぞれの読書体験や方 法について経験を交換しました。



/詩を読む紀

マリンサイエンスミュージアム: 目の見える人と見えない人の まっすぐ&ぶらぶら対話ツアー

東京海洋大学マリンサイエンスミュー ジアムを舞台に対話ツアーを実施! 鯨の骨格標本や鳥類の剥製、南極に関 する展示物を鑑賞し、言葉を通してそ れぞれの見方から発見や感想、疑問を 共有しました。





増上寺の武智公英上人にインクルーシヴの 観点から、現在の取り組みや今後の課題に ついてお話していただきました。また、「と つくる」のメンバーからは、当事者の視点 からの寺社での体験や困難を共有していた だき、その後、参加者全員で意見の交換を 行いました。 [2023年2月16日(木)開催]

「詩を持ち帰って欲し い」という思いから詩 が印刷された「詩のお みやげ」カードを配布 しました! QR コード から朗読のリンクにも

詩人・西脇順三郎の詩を題材 に詩の楽しみ方を見つけてみ ようというワークショップで す。 事前に参加者に送った3 編の詩について、どのような 読み方をしたのか聞いてみま した。その後、展示室で朗読 を聞いたり、原稿や押し花帳 などを見たりして、詩の印象 がどう変わるのかを味わいま した。

「詩は難しい」「詩の読み方が 分からない」と言っていた参 加者たちも、最後には「分か らなくても楽しい!」と西脇 の詩世界への入り口を見出し ていたようです。

[2023年2月25日(土)開催協力:とつくる]

WWW.WWW. 飛ぶことができます。

学んだこと

「健常者」という言葉

「健常者」という言葉の使い方についてみんなに聞い てみました。目の見えないスタッフの方からは、こう した語について「障がいのない状態が正常であるとい う印象を受ける」との意見ももらいました。参加者が 視覚障がいのみならば「晴眼者」を用いることも可能 ですが、聴覚障がい者や他の障がい者も参加する可 能性があります。あえて「健常者」を使うという選択 もありますが、こうした意見もあるなかでこの語を積 極的に使うのは個人的には避けたい気持ちがありま す。 話し合いでは「参加者 10 名のうち、視覚障がい 者3名、聴覚障がい者2名」というように、障がい のない人(=マジョリティ)にはラベルをつけず表記 するのが良いのではという結論に落ち着きました。



2023/3/11(土)開催 西脇展ワークショップ「散歩編」キャンパス内を散歩する参加者





伝わりやすさのチェック

当初、作成しようとしていた申し込みフォームが当事者からは使いづらいということで、今回は、おすすめしていただいたGoogleフォームで作成しました。また、イベントHPや申し込みフォームの内容や分かりやすさについても、とつくるの目の見えないスタッフさんに確認してもらい、言葉の表記や説明文の工夫について助言をいただきました。目の見える人たちだけで進めていると、見過ごしてしまうことも多いので、当事者の視点からのチェックは必須。

▶申し込みフォームはどれが一番使いやすいんだろう?…p.16

見えない人・見えにくい人の ガイディング

障がいの程度は人それぞれ。近くの駅まではひとりで来られても目的地までの送迎が必要な人や、送迎は必要ないけれど館内ではガイディングが必要な人…。そもそも、見えない人は白杖で数十センチ先を確かめながら歩くため、知らない道を歩くハードルがとても高いそうです。普段は Google Maps の音声案内を利用したり、道の手がかりを事前に覚えて歩いたりしているとのことですが、初めての場所に行くのはどうしても難易度が高くなりがち。なので、今回はサポートが必要な場合、申し込み時の備考欄で伝えてもらうようにしました。

過剰サポート

当事者が望む必要なサポートは当然行うべきですが、過剰なサポートになってしまう可能性もあります。例えば、道の案内。増上寺で行った語る会では、車の音声ナビのように細かく説明することは丁寧で親切だけど、そこまで情報を欲していない場合もあるとの意見が出ました。実際、親切心からであっても、見える人が常に物事の説明をしてしまうと、立場の固定に繋がってしまう危険性があります。ミュージアムでも、障がい者が必要とする情報やサポートを気軽に伝えられる、そしてそれに答えられる環境づくりをさらに進めていく必要がありそうです。

どこまで何をすればいいのか

参加者のお迎えはするのか、手話通訳 はどうするのか、託児所を準備するの かなどの配慮。そしてそれをどこまでや るのか、出来るのかの決定が必要。こ れは企画の根幹にも関わるので方向性 をチームで決めておくとスムーズに進む 気がします。

障がいの把握

イベント申し込み時の Google Form にて「障がいのあり・なし」と「障がいの種別」という質問項目を設けました。今回のように様々な見え方の人が集まるワークショップでは申込者が全員視覚障がい者の可能性もあります。事前準備の段階でスタッフを拡充したり、環境を整備するためにもきちんと把握しておくことが大切でした。イベントの種類によっては、こうした質問をすべきではない場合もあるため、その都度質問項目のチェックは必要だと感じました。

余裕を持った時間の設定

余裕を持った時間の設定というのはどのワークショップにおいても非常に大切。スタッフの病欠等を含め、不測の事態が起こる可能性は常に念頭に置いてスケジュールを組む必要があると改めて実感しました。

例えば、移動時間は長めに設定してお くと余裕がもてました。

インクルーシヴの根本

参加者がいるかいないかに関わらず、 事前に手話通訳の手配をしておく、細かいケアが出来るように充分な数のスタッフを確保するなど、誰もが参加できる状況を準備することが「インクルーシヴ」の考え方であると実感。支援が必要な参加者の申し込みが無さそうだから事前に準備する必要は無いだろうという憶測で動くのは運営側の都合。取り組みの過程で、このように排除されてしまう人がいると痛感しました。



2023/2/25 (土) 開催ワークショップ「読書 / 詩を読む編」 展示室内で実際の原稿もみんなでみた



2023/3/11(土)開催 西脇展ワークショップ「散歩編」にて イサム・ノグチ作《無》を触る参加者たち

発見!

本の読み方

西脇展関連ワークショップのため、「読書」をテーマにプレ座談会を敢行。機械音声読み上げ、人の声での朗読、点字で読むなど、目の見えない人の中でも「本の読み方」が分かれました。詩を読む際には「自分の頭の中で読み上げたいから、音声ではなくて点字で読みたい」という声も。中には野球中継を聞きながら点字で本を読むという強者もいらっしゃいました!

お迎え

視覚障がいを持つ人のなかには、初めて行く土地だとガイディングが必要となることもあるので、今回は駅からミュージアムまでお迎えとお見送りを行いました。ガイドする側は緊張するけれど、見えない人や見えにくい人はむしろ不慣れな人にガイドされていることに慣れているとのこと。ですが、分からないこと、心配なことがあったらまず本人にきちんと確認するのが良いですね。

- ▶過剰サポート…p.10
- ▶どこまで何をすればいいのか…p.11

偶然との出会い

「どうやって新しい読む本と出会う?」というところから生まれた話題。目の見える人は本屋さんなどで偶然見つけた本を読んでみたとの出会いがありますが、目の見えない人は偶然になにかに出会うということが非常に難しいとのこと。みんなで偶然に出会いに行く、そんなワークショップもあったら面白いのかも。

迷惑をかけてしまいそうな場 所には行かない・行けない?

賽銭箱の大きさも分からないし、その 奥に何があるのかも分からないため、言ってしまえばお寺や神社は「手から小銭 が消えていく場所」のように感じてしまう。こんな発言が増上寺で開催した語る会において、目の見えない人からありました。みんなで語らうこの日のような場所が無ければ聞けていなかったかもしれない個人の考えや思い。異なる経験や体験をみんなで共有し合うこと、その手立てとして対話が力を発揮することを実感しました。

見よう見まねが出来ない

お寺や神社には参拝やお焼香の仕方に ルールがあります。晴眼者は前の人がやった事を見て、なんとなく真似をすることが出来ますが、目の見えない人はそれが出来ないというお話がありました。また、前の人に倣って少しずつ進まなければいけない行列に並ぶのが苦手という発言も。

<mark>社会のベーシ</mark>ックを変える

語る会の中で「お寺での坐禅体験に行く際に、まず自分たちの行きたいという気持ちに応えてくれたのが嬉しかった」という発言が目の見えない方からありました。必ずしも物理的に整備をしなければならないのではなくて、受け入れ側の心持ちから変えることが大切というのは学びになりました。しかしその一方で、受け入れに感謝するのが普通では無くて、そもそも参加できることが「普通」になる必要があるのではないか、という指摘も。今まで私たちが思ってきた「普通」がまさに今変わっていて、社会の側が障がいを作り出しているという社会モデルの考え方と深くコネクトする話題でした。



点訳した詩を配布しよう と思ったけど…

「カルナラ」 の一環で点訳コン テンツを制作しよう ということになり、詩 人・西脇順三郎の詩を配 布するという案が出まし た。しかし、制作費の関係 で来場者全員には配れない … (世知辛い)。でも、来場 者のなかで視覚障がい者(と 思われる人) だけに配布し ようとすると、当然なが ら配布する対象の選別に なってしまいます。無料配 布物として机に置いておく という提案も出ましたが、 KUAC ではそのことを点字や 音声等で伝えられる設備の用意 がありません…。モノを制作し ても、まず環境が整っていなけ れば上手く活用することは 出来ないと痛感した出 来事でした。

QR コード近すぎ事件

西脇展では目の見えない人のために論考と 朗読詩篇の書き起こしデータを公開していま す。会場で配っている冊子の巻末に QR コード を載せています、が…2つの QR コードが近す ぎて、実際に目の見えない人にスキャンをしても らうとどちらか一方しか読み取れないという結 果に。実際に使う人のことも考えたデザイ ンが必要だと実感しました。

人数の思わぬ落とし穴

マリンサイエンスミュージアムで の対話ツアーは参加希望者が定員 の3倍以上(!)も集まったため、急 きょ枠を増やして対応しました。と ころが、実際の参加者に加えて、 同伴者、手話通訳、ファシリテー ター、スタッフ…と気づけば1グ ループ20人弱の大所帯に…。当 日はなんとか乗り越えましたが、 その辺りも考慮して最初の人数設 定の必要があると学びました。

> ▶もやもや どのくらいの人数、バラ ンスが適切? p. 16





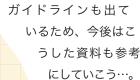
入ったチラシを実際に刷っ てみたら、見えにくい人や色覚 多様性を持つ人にとっては文字が小さく細く 読みづらい結果に…。充分な大きさの字や、はっきり した色合いなど、まずは誰かに伝える最初の発信の段階であ る広報からもインクルーシヴを考える必要がありますね。 インクルーシヴを語る会では、参加者の見えにくい人から実際 に指摘を受けてしまいました。見えやすさは人それぞれではあ るものの、フォントは11ポイント以上で出来れば太字の方 が見えやすいとのこと。また、色彩のメリハリがはっきり していないと分かりにくいとも。現在では、ユニバー サルデザインの視点から配色

灰色地に白文字の

HPが上手く見られない!

見えない人にスマホか らHPにアクセスしてもらった ものの、最新のお知らせが表示され る黒いポップアップが邪魔でト手く開けま せん。しかも、このポップアップ、通常はタップ すれば消えるのですが、音声ガイドを使っていると 押しただけでは消えてくれず先に進めないのです(な ので、一回音声ガイドを切ってもらってポップアップ を消しました)。これは実際に見えない人にテストして もらうまで全く気づきませんでした。HP のシステム をすぐに変更することは難しいと思いますが、今後 改善が必要そうです。





「障がい」という言葉の扱い方

「出会ったことば」で説明したように、「障害」の表記にはいくつかの方法があります。 そのため、この ZINE で私たちがどの表記を選択するか非常に悩みました。ひらが な表記が消極的な変換という意見はとてもよく分かります。また、慶應義塾の方針 に従えば、漢字で表記すべきでしょう。しかし、今回「とつくる」さんに HP の文 **章チェックをお願いした際、目の見えないスタッフから「ひらがなで表記したほう** が良い」との指摘を受けました。どちらの意見にも理がありますが、一緒に参加し てくれている人が少しでも不快感を感じるならば、今回は「障がい」とひらがなで 表記しようと決めました。とはいえ、慶應義塾大学アート・センターとして 今後どのような表記にするかは、これからも様々な意見 に耳を傾けながら考えていかなければならないと思い

届くべき人に情報がきちんと 届いて欲しいけど…

ます。 ▶出会ったことば 障がい者、障害者…p. 4.

どうちかいいいんた 今回、最初にイベント情報を KUAC の SNS (Twitter, Facebook, Instagram) で公開したものの、障がい者の参加申し込みはほとんどな し…。「とつくる」さんの Facebook でのお知らせ後には見えない人、 見えにくい人、聞こえない人と様々な立場の人からたくさんの申し込み がありましたが、現状の KUAC の発信範囲では情報が行き届いていない かも…と感じました。ワークショップの参加者からは「参加できて良かっ た」、「またやって欲しい」というような感想をいただくことができたので、 今回情報が行き届かなかった潜在的な参加希望者も多くいるのではない かと思います。普段、見えない人や聞こえない人たちがどのようなルー トでイベントのお知らせを受け取っているのか知る必要もありそうです。 今後、協生環境推進室との協力や障がい当事者へのヒアリングとともに、 SNS 発信を工夫したい!

申し込みフォームはどれが一番使いやすい?

実際に使っている方から、Google フォームのフォーマットに慣れているので一番使 いやすいというお声をいただきました。しかしながら、フォームを使い慣れていな<mark>い</mark> 人や、申し込みの直前で画像認証が出てきて申し込めなかった参加者の方もいました。 他館の WS ではフォームでの申し込みが難しい人のために、メールでの申し込み方 法を記載している場合もあります。今後はこのように複数の方法を用意するのが良い のかも。そのためにも、HPにはワークショップ主催の問い合わせ先(メールアドレス・ 電話番号) の掲載は必須です。▶学んだこと 伝わりやすさのチェック…p. 10.

どのくらいの人数、 バランスが適切?

対話型ワークショップにおいては、少人数の方がみん なが発言しやすい環境が作れます。その一方でなるべ く多くの人にワークショップに参加して欲しいという 気持ちもあります。しかし参加人数が増えるとスタッ フの人数も増やす必要が…。参加者にとっての満足感 や充実感はなんなのか考えつつ、実施側のオーバー ワークも防ぎたいというのが葛藤です…。

▶失敗した~ 人数の思わぬ落とし穴…p. 14.









英語での表記

日本語にも、目の見えない人、目の不自由な方、視覚障害者、視覚障がい者、盲目の方など、さまざまな言い方があります。英語においてもこれは同じこと。例えば今回お世話になった「視覚障害者とつくる美術鑑賞ワークショップ」は「Verbal Imaging Museum Tour with Visually Impaired People」という英訳をあてています。どの翻訳をあてるかもステートメントのひとつになるかもしれません。例えば、persons with disabilities, disabled persons, seeing difficulties などなど……

ぶらぶら散歩してみよう

2023年3月に西脇展ワークショップの第2回として散 歩編を行いました。散歩編では西脇の詩に出てくる植物 や生き物をキーワードに「よそ見」をする目をつくり、 三田キャンパス内を「ぶらぶら」歩いてみようというの がテーマでした。アイデアの発端となったのは、プレ座 談会での「とつくる」スタッフさんとの会話でした。知 らない道を歩くのはハードルが高いので、散歩に対する 憧れはあっても難しいそう。今回はみんなでぶらぶら歩 きながら、壁のタイルの触りごごちを確かめたり、小鳥 の声に耳を傾けたり、詩に登場する「野ばら」を偶然発 見したり……普段は三田キャンパスに来ると、歴史ある 建物や彫刻、大きな樹木といった目立つものばかりに目 を向けてしまいがちですが、「よそ見」をしながら歩くこ とで、これまで見過ごしていた道やなんてことのない雑 草にも自然と目が向き、会話が弾みました。散歩って、 ぶらぶらするってとっても楽しい。いつか西脇が散歩し ていた多摩川辺りのルートも辿ってみたい!



2 編集後認

吉岡萌

鴻池朋子氏の「みる誕生鑑賞会」への参加を経てインクルーシヴ鑑賞の試みに興味関心を得たものの、今回のワークショップの準備を通して初めて知ることばかりで、もっと学んでいかなければという思いを新たにしました。そして、同時に強く感じたのが「しゃべる」って大事だなということ。今回、Zoomや対面による打ち合わせ、下見を通して、私たちはたくさんのことを言葉で共有しました。確かに、しゃべるという行為は冗長になりがちで、普通より多くの時間がかかってしまうことも事実です。でも、「おしゃべり」の過程にあったため息やもやもやした疑問、ちょっとした呟きから、何か新しいことに気づく機会を得ることもできます。今回の ZINE には、そうした会話のなかで発見した物事の断片を散りばめました。これからももっと「おしゃべり」や「よそ見」をしながら、みんなが楽しめるような環境づくり・ワークショップができたらいいな。

福田真子

「みんなちがう」という大前提の下、じゃあどうしていこう?というのが今私たちが取り組んでいること。自分の発言によって誰かを傷つけてしまう、嫌な思いをさせてしまうという気持ちから、うわべだけの表面的な話しか出来ない時もあります。でも、例えば自分が中学生の時には生理の話題を気軽に語れなかったのが、今少しずつもっとオープンに語れるようになってきている実感があります。「センシティブな話題」として遠ざけるのではなくて、もちろん勉強はしながら、もっとどんどん気軽に話そうよという気持ちになりました。ドイツに外国人として住む私にとって「インクルーシヴ」は当事者性を持った身近なテーマです。今私たちがこの時点で考えていることを形に残せたので、これをどんどんアップデートしていければ良いなと思います。

のんな本サイトが発考になりまで!

書籍

伊藤亜紗『目の見えない人は世界をどう見ているのか』光文社、2015年

伊藤亜紗「当事者の経験にもとづく視覚障害者の身体論」『美学』第 68 巻第 2 号 (251 号)、 2017 年、1-12 頁

伊藤亜紗「身体の違いがひらく空間」『アナザーユートピア――「オープンスペース」から都市を考える』 NTT 出版株式会社、2019 年、220-228 頁

大髙幸「視覚に障害のある人々が美術を経験する場としての美術館――米国における社会的文脈とメトロポリタン美術館の事例から」『芸術学』三田芸術学会編、14号、2010年、5-20頁

寺島洋子、大髙幸編著『博物館教育論』放送大学教育振興会、2012年

津田英二『インクルーシヴな社会をめざして』かもがわ出版、2011年

日本ソーシャルインクルージョン推進会議編『ソーシャル・インクルージョン――格差社会の処方箋』 中央法規出版、2007 年

広瀬浩二郎『万人のための点字力入門――さわる文字から、さわる文化へ』生活書院、2010 年 広瀬浩二郎『さわって楽しむ博物館――ユニバーサル・ミュージアムの可能性』青弓社、2012 年

参考リンク

「『見えないこと』から 『見ること』を再考する: 視覚障害者とつくる美術鑑賞ワークショップ」アートスケープ https://artscape.jp/focus/10156072_1635.html

「視覚障害のある人と共に楽しく鑑賞するには」エイブル・アート https://www.ableart.org/org/mar/skill.html

「障害者は英語で何て言うの?~【handicap(ハンディキャップ)】他」障害者.com https://shohgaisha.com/column/grown_up_detail?id=177

「『障害』と表記することについて」慶應義塾協生環境推進室 https://www.diversity.keio.ac.jp/bf/index.html

内閣府 ユースアドバイザー養成プログラム https://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/h19-2/html/4_1_4.html

独立行政法人国立特別支援教育総合研究所 http://www.nise.go.jp/blog/2000/05/b1_h060600_01.html



Special Thanks

視覚障害者とつくる美術鑑賞ワークショップ

発行日: 2023年3月24日

発行者:慶應義塾大学アート・センター

監修:慶應義塾大学アート・センター(渡部葉子、吉岡萌、福田真子)

執筆・編集:吉岡萌、福田真子 イラスト:吉岡萌、福田真子

写真:森山緑、石本華江、吉岡萌、福田真子、木村麻悠子、菅原真彩

HP: http://www.art-c.keio.ac.jp/

助成:令和4年度文化庁 Innovate MUSEUM 事業





